〔伝統的な言語文化〕の学習指導改善

―落語教材の検討を通して―

小林正行・中村敦雄・伊藤宏康・片岡美穂
木本悠太・小林香名江・武井彩香・八木美穂

群馬大学教育実践研究　第三十一号
二三五～二四八　二〇一四　別刷

群馬大学教育学部　附属学校教育臨床総合センター

〔伝統的な言語文化〕の学習指導改善 ―落語教材の検討を通して―

Improvement of “traditional linguistic culture” ―Critical examination of “rakugo” teaching materials―

小林正行（Kobayashi Masayuki）・中村敦雄（Nakamura Atsuo）・伊藤宏康（Ito Hiromichi）・
片岡美穂（Kataoka Miho）・木本悠太（Kimoto Yuta）・小林香名江（Kobayashi Kanae）・
武井彩香（Takei Ayaka）・八木美穂（Yagi Miho）
国語教育講座（Japanese training course）

キーワード：伝統的な言語文化　古典教育　落語　映像教材
（二〇一三年一〇月三一日）

一　問題の所在

平成二〇年版学習指導要領では、〔伝統的な言語文化〕が新設された。これに対応し、国語教育の現場では、古典教育の拡充が求められている。『月刊国語教育研究』二〇一三年九月号特集「古典教材を掘り起こす」では、古典教材開発の問題提起として、

・「分かること」「今と同じ言葉」をキャッチしながら内容を理解し、共感的に楽しむ。

・ものの見方や考え方に対する共感的な理解と、さらに「現代との違い」を意識し、今の自分と比べて考える

という観点が挙げられている。

学習者に古典への親しみを持たせるためには、内容の理解を欠かすことはできない。その大きな障壁となりうるのが、言葉そのものの違いと、背景となる文化や価値観の違いである。前掲の言葉を裏返せば、『「分からないこと」「今と違う言葉」は、内容を理解できず、共感できない』ということになる。

本稿では、この障壁を乗り越える手立てとして、古典芸能の一つである落語に着目した。落語は、理解しやすさ、親しみやすさの点で、古典の定番といえる文語文の教材とは大きく性質を異にする。言葉は現代の話し言葉と極めて近く、また演者の仕草や表情からも心情や情景が理解しやすい。内容面でも、笑話が多く、また現代にも共通する心情も描くため、親しみやすい性質を持つ。この性質を期待してか、小・中学校の国語教科書にも落語教材が採録されている。しかし、落語へのなじみも乏しく、本来「聞く」ものとして発達した落語を、文字化された教科書で、どのように扱い、何を教えればよいのか、とまどう現場の声も耳にされる。

これらの問題意識に基づき、平成二五年度前期大学院教育学研究科の授業「授業総合演習Ⅰ」を通じ、二名の教員と、六名の大学院生で、落語を〔伝統的な言語文化〕の指導の教材として扱うための検討を行った。

本稿の構成について述べる。第二章では、落語をより効果的な教材とするために、落語についての基礎知識を確認する。続いて、第三章で、学習指導要領における落語の扱いを確認する。第四章で、小・中学校で現在採用されている国語教科書の落語の教材を、出版社ごとに分析し、問題点を検討する。その指摘を受ける形で、第五章で、落語に教材として期待される価値を考察し、授業提案を行う。

本稿が、学習者と落語との笑いに満ちた出会いに資すれば幸いである。

（小林正行）

二　落語の基礎知識

教材として落語を扱うにあたり、特徴、歴史、手法、構成という四観点から、落語の基礎知識について確認することにしたい。

まず一点目の落語の特徴は、噺（はなし）そのものの特徴と噺の演じ方の特徴とに二分できる。噺の特徴として、第一に、漫談とは異なりスジ立てのしっかりした噺であること、第二に、情景や登場人物の心情を説明する「地」の部分を極力省略した、会話主体の噺であることが挙げられる。なお、落語の噺はその成立時期によって区分されており、一般に江戸から大正期までに作られたものを「古典落語」、戦後になって作られたものを「新作落語」と呼んでいる。また、落語には話題による分類がある。聴衆の笑いを誘う「滑稽噺」がその大半を占めるが、他に、怪異や怪談的要素の強い「怪談噺」、心の機微を主軸に描いた「人情噺」などがある。

落語の演じ方の最大の特徴は、演者がただ一人で演じることにある。落語には他の演劇のように、大道具の装置や小道具がない。演者は扇子と手ぬぐいをそれぞれ小道具に見立て、上半身だけの仕草やセリフによって、何人もの人物を演じ分けるのである。その際、演者は扮装や化粧などはせず、素顔で和服を着て、高座と呼ばれる舞台で座布団に正座して演じる。この現代で主流となった落語の特徴的な形態は近代以降に確立された。

二点目に、落語の歴史について触れたい。落語の発祥は戦国時代とも江戸時代とも言われる。戦国時代から江戸時代初頭にかけて、有力な武将や大名の側に仕え、芸能や咄（はなし）を披露し、殿様の無聊を慰める「御伽衆」という職掌があり、咄を専門とするものを特に「御咄衆」と言った。中でも、安土桃山時代の話し手、安楽庵策伝がよく知られており、策伝のまとめた『醒睡笑』が落語の基礎を作ったと言われている。

一方で、江戸時代前期に露の五郎兵衛なる人物が京都で辻噺を始めたことに落語の起源を求める説もある。こちらは権力者ではなく、庶民を相手に噺をするようになった。寄席が誕生し、本格的な職業として落語家が認められるようになったのも、江戸に入ってからのことだと言われている。

こうした発祥以降、江戸幕府の弾圧によって一時衰退を見せるも、幕末から明治期にかけて、落語は隆盛を遂げる。これに大きく寄与したのが、三遊亭圓朝である。当時絶大な人気を誇った圓朝落語は口演のみにとどまらず、明治一七年七月『怪談牡丹燈籠』を皮切りに、数々の圓朝落語速記本が出版された。話芸の活字化は、当時の文芸界に革命をもたらし、二葉亭四迷や山田美妙による言文一致運動、延いては近代文学の確立にも大きな影響を及ぼした。

（八木美穂）

三点目として、落語の手法についてみていきたい。前述の通り、落語は会話主体で表現が成り立っているところに特徴がある。よって演者は、最低でも二人の登場人物と、スジの進行を説明する演者自身の、少なくとも三者を一人で演じ分ける必要がある。そのため、落語には、会話を際立たせるための手法が、大きく分けて二つ存在する。一つは、「上下をきる」という手法で、一人で複数の人物を表現するために、顔を左右に向けて人物を演じ分けるものである。もう一つは、扇子と手ぬぐい等を様々なものに見立てて使用する手法で、仕草や役柄を演じ分けるために用いられている。

最後に、落語の噺の構成についてであるが、一般的に一席の落語は、「マクラ」「本文」「オチ」の三つの部分に分けられる。「マクラ」は、噺の本題にとりかかる前の導入部にあたり、世間話や気の利いた小咄などをすることで、客の気分をほぐし、うまく展開につなげる役割がある。また、これから演じる噺についての予備知識や解説を、マクラの中でさりげなく取り上げることもある。「本文」は、落語の展開部にあたる。本文は一つの固定されたスジにとらわれず、演者による演出に委ねられている。そのため、同じ噺でも、言葉遣いや噺そのものの内容が、演者ごとに大きく異なってくるとともに、噺を省略したり、途中で打ち切ったりして、噺の長さや結末が変わることもしばしばある。これらは、演者本人の演出であると同時に、その場にいる客との関係や、やり取りの中でも生じるものでもあり、一席の落語ごとに変化するものである「オチ」は、機知に富んだ結末のことであり、オチをつけることで噺が終わる。オチの演出には、集中度の高さが求められ、極力言葉の無駄を省くことが重要とされる。（片岡美穂）

三　学習指導要領との関連

本章では、落語と学習指導要領との関連を詳しく検討したい。

以前の平成一〇年版学習指導要領において、古典は「読むこと」の中で扱われていた。学習指導要領解説の「読むこと」の配慮事項では、次のように記述されている。

古典に対する興味や関心を深めさせ、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てるための教材については、生徒の発達段階や学習の実態を的確に把握し、それに応じたものを選定することが大切である。古典に関心をもたせるように書いた文章や、易しい文語文、格言・故事成語、詩歌、物語、随筆、能・狂言などの様々な親しみやすい古典の文章がある。

ここでは古典芸能として能と狂言しか挙げられておらず、落語はいくぶん学校教育になじまないものと考えられていたのではないであろうか。また、「読むこと」を前提にした「古典の文章」という文言であることも注意される。

それに対し、平成二〇年一月の中央教育審議会答申を踏まえ、平成二〇年版学習指導要領より新設された〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕では、小・中学校ともに落語についての言及が行われている。学習指導要領解説において、〔伝統的な言語文化〕は次のように説明されている。

言語文化とは、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり文化としての言語、また、それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを幅広く指している。

この文言に照らし合わせると、落語は、「各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能」として、言語文化の中に位置づけることができるであろう。

さらに同解説によれば、「伝統的な言語文化に関する事項」は、「小学校から系統的に設定し（中略）中学校においてはそれを踏まえ、一層古典に親しませるとともに、我が国に伝わる言語文化について関心を広げたり深めたりすることを重視して指導する」こととしている。ただし、古典に親しませ、言語文化に対する関心を高めることを重視して指導するという記述にとどまっており、何をどのように扱うかは、教科書作成者や指導者に委ねられている。

では、各学年の事項の中から、落語に関するものを挙げる。小学校第五学年及び第六学年における指導事項の一つは、「古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること」である。ここでは、古典を解説した文章を基に、昔の人々の生活や文化など、古典の背景をできる限り易しく理解させ、昔の人のものの見方や感じ方に関心をもたせたり、現代人のそれと比較したりして、古典への興味・関心を深めるようにすることが重要になる。その際、「言語文化への興味・関心を深めるために、能、狂言、人形浄瑠璃、歌舞伎、落語などを鑑賞することも考えられる」と述べられている。

また、中学校第一学年における指導事項の一つに、「古典には様々な種類の作品があることを知ること」がある。ここでは、古典には様々な作品があり、一般的に幾つかの種類に分類されることを指導する。学習指導要領解説では、「様々な種類」として、和歌、俳諧、物語、随筆、漢文、漢詩などに加え、「能、狂言、歌舞伎、古典落語などの古典芸能も含まれる」としている。

さらに、中学校第二学年における指導事項の一つ、「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること」を扱う工夫として、音声や映像メディアの活用が挙げられており、落語を教材として扱うための示唆になろう。

このように、平成二〇年版学習指導要領では、古典が〔伝統的な言語文化〕として独立し、落語が教材としての立場を得た点が注目される。また、従来の紙媒体を中心とした古典の在り方に対し、音声や映像メディアを活用するという、各ジャンルに応じた教材の扱い方が示された。学習指導要領において教材としての立場が規定された落語を積極的に扱うことにより、〔伝統的な言語文化〕の学習指導をより効果的に行うことができると考える。（武井彩香）

四　現行教科書における落語教材を対象とした分析

本章では、小・中学校で現在採用されている国語

教科書における落語の教材を、出版社ごとに分析することで、教材としての落語の取り扱われ方を明らかにし、その問題点等を詳しく検討したい。

分析に入る前に、表1として、各社教科書の落語の教材とそこで取り上げられている噺を、表2として、特に落語を大きく取り上げている教材に対する指導書にとりあげられた内容をそれぞれまとめた。

なお、東京書籍の指導書については、記述が少なく、特筆すべき事項がないため、表2では割愛した。

（木本悠太）

（1）光村図書

同社の落語教材のうち、指導事項まで細かく定められているのは、小4の「額に柿の木」のみであり、残りの教材には指導法についてのわずかなアドバイスのみ載せられていた。

教科書中で同教材の該当頁を開くと、そこには額から柿の木が生えている男性の一枚絵が見開き頁に掲載されている。少し離れた別頁には、「額に柿の木」の噺が昔話調で収録されている。

一枚絵の頁には、補足説明として「この話は、落語としても親しまれています」という一文のみ記され、その他には一枚絵の頁にも噺が収録されている頁にも落語に関する説明はない。

指導書には、噺が載せられている頁の補足として、擬音語や擬態語の多さについて意識しながら指導するよう記されているが、落語についての説明や落語作品として扱うような指導事項は記されていない。これは同教材が、同社独特の読み聞かせに重点を置

表1. 各社教科書における落語の教材と取り上げられている噺

	学年・教材名	噺
光村図書	小４「額に柿の木」 小６「古人のおくり物」 中１「言葉としぐさの伝統芸能―古典落語」	額に柿の木 寿限無 時そば
学校図書	小２「つづき落語ばなしを作ろう」	額に柿の木
三省堂	小４「落語　じゅげむ」 小４「落語を知ろう」 小５「まんじゅうこわい」 中１「落語の世界」	寿限無 初天神 長屋の花見 まんじゅうこわい
東京書籍	小３「じゅげむ」 小６「伝統芸能に親しもう」	寿限無
教育出版	小４「ぞろぞろ―落語」 小４「寿限無（落語）」 中１「落語『三方一両損』」	ぞろぞろ 寿限無 三方一両損

表2. 指導書における主な落語教材の指導内容

	教材名	目標	言語活動例
光村図書	小４「額に柿の木」	・読み聞かせを聞き、登場人物の行動を中心に、場面の様子について想像を広げることができる。	・昔話の読み聞かせを聞き、話の面白さや語り口調を楽しんだり、知っている昔話についておもしろさを話したりする。
学校図書	小２「つづき落語ばなしをつくろう」	・想像したことをもとにして、続き話を進んで書こうとする。 ・読み手に分かるように、組み立てや表現を工夫して続き話を書くことができる。	・「額に柿の木」の冒頭部分を読み、その続きとなる話を考える。
三省堂	小４「落語じゅげむ」	・落語の面白さが伝わるように言葉の強弱や間の取り方などに注意して話し、互いに聞き合う。	・教科書本文の「寿限無」を暗記し、落語の発表会を行う。
教育出版	小４「ぞろぞろ―落語」	・落語による会話から、場面の様子や人物の気持ちを想像し、表現することを楽しみながら読む。	・「ぞろぞろ」を群読する。 ・会話中心の文章を書き、友達と読み合う。

いた単元の一つであるためと考えられる。

擬音語や擬態語がふんだんに盛り込まれていることから、読み聞かせを聞く学習者たちの想像を膨らませようとする工夫がうかがえる。そのため、噺を読んだり、聞いたりする教材として優れている点は見られるが、〔伝統的な言語文化〕としての落語に触れるという狙いは感じられない。落語に触れさせるというよりも、学習者を昔話になじませるという狙いの方が強くあると思われる。同教材を用いることによって、学習者に昔話を楽しむ態度は身に付けさせられるが、落語に親しませる教材とは言い難い。

（2）学校図書

同社の落語に関する教材には、小2で扱う「つづき落語ばなしを作ろう」（お話をつくろう）という教材のみが存在する。

同教材は、学習者に創作話を作らせる趣旨で、続き話の材料として、「額に柿の木」と思われる噺が用いられている。この噺の冒頭部分を学習者に提示し、続き話を考えさせる。本来の続きは後頁にて簡単に説明されるが、オチの部分までは使われていない。

指導書には、指導のポイントとして「落語に慣れさせる」と題された記述があった。その中では、落語の特徴についての説明や、学習者が落語に親しめるような工夫点が紹介されている。指導書だけ見ていると、比較的落語を重視している教材のように見えるが、指導事項が「書くこと」に分類されているためか、実際の指導内容の中ではあまり落語を教材として活用していない。あくまで落語は、創作活動の導入として用いられているだけなのだ。

話の創作において「笑い」が中心に据えられていることで、学習者の興味をひく試みであると考えることもできるが、落語の要素として「笑い」の部分にしか注目されていないという点は、一つの問題点として挙げられるだろう。他教科書会社では、古典落語自体をテキストにしているのに対し、同社の教科書内では、古典落語は導入の一要素に過ぎず、活動の主体は「おもしろい話を創作して書く」という部分に限られる。

（小林香名江）

（3）三省堂

同社の落語の教材は、小4が充実している。その教材の一つである「落語　じゅげむ」では、まず、落語とは何かを大まかに把握させるための説明が述べられた後に、現代風（クラスメイトが登校のために「じゅげむ～」を迎えに来るといった内容）「寿限無」の一節が載せられている。また、柳家花緑と、扇子・手ぬぐいの写真が一枚ずつ載せられている。

もう一つの小4の教材である「落語を知ろう」では、「初天神」「長屋の花見」「寿限無」三つの噺の途中までのあらすじの上部に、それぞれの噺に関する演者の仕草（初天神→みたらし団子を食べる、長屋の花見→酒をつぐ、寿限無→子どもが泣く）が写真で紹介されている。その他にも、もりそばを食べる、文字を書く、といった仕草が写真で紹介されている。

他学年においては、小5で音読に特化させた読み物教材として「まんじゅうこわい」が取り上げられており、中1では落語が演じられている寄席の構造や道具、演者の仕草等を写真付きで紹介している。

全体として、落語の扱われ方が手厚いため、他社よりも落語とは何かを指導するのに適している教科書であるといえる。また、指導書の内容も充実しており、特に小4「落語　じゅげむ」に関しては、目標・指導事項・学習活動例・めあて等が明記されているため、落語にあまり造詣の深くない教師でも指導しやすいものになっている。

しかしその反面、肝心の落語の面白さが児童に伝わるのかに関してはいささか疑問を感じざるを得ない。なぜなら、メインの教材として取り上げられている「寿限無」は、演者が目の前で言い立てていればおもしろいが、文字言語として見るとあまり笑いを誘うような噺であるとは言いづらいためである。「寿限無」よりは児童の関心をつかむであろうと予想される「まんじゅうこわい」に関しては、落語の噺というより一つの読み物として取り上げられているため、落語の面白さを充分に伝え得るものではないと考えられる。

（木本悠太）

（4）東京書籍

同社の落語に関する教材には、小3で「じゅげむ」、小6で「伝統芸能に親しもう」という教材がある。「伝統芸能に親しもう」では落語を含めた伝統芸能が紹介されている。そのため、実際に授業の教材として取り扱うことが想定されているのは「じゅげむ」

のみである。本教材は、クレヨンハウスから出版されている川端誠『落語絵本４　じゅげむ』の挿絵と文章を載せたもので、巻末にある付録の「読書の部屋」という単元で取り扱われている。挿絵とわかりやすい文章で、「じゅげむ～」という名前がついた由来を説明するという内容である。形式はマクラ、本文、オチという展開で、落語の構成を伝えやすい。

しかし問題点として、落語についての記述が少ないことが挙げられる。この教材には、落語という言葉が文章中に二度出てくるだけで、落語がどの時代に始まったのか、どのような芸能であるのかなどの落語の知識を学ぶことや、実際の落語を見たり聞いたりすることができない。落語を学ぶことを期待された教材であるならば、噺の内容だけではなく、落語そのものに触れる記述が必要であろう。

（5）教育出版

同社の落語に関する教材には、小４で「ぞろぞろ」、「じゅげむ」中１で「三方一両損」といった噺がある。指導書では全七時間の指導計画を提案しており、落語の教材開発に力を入れているといえる。

本教材の特徴は、大きく三つ挙げることができる。

一つ目は、落語に関する説明の充実が挙げられる。落語の成立とオチの存在を導入の記述によって説明していること、それぞれの落語の内容に関係する時代や場面、また噺の中に出てくる物の説明が多く記述されている。

二つ目は、学習者が役割を決めて、その役を音読、または演じることを想定した台本形式であることが挙げられる。主に会話文からなり、登場人物の動きや仕草などが、括弧書きで補われ、また冒頭頁に登場人物とその年齢が設定され、提示されている。

三つ目は、教科書に載っている落語はすべて三遊亭圓窓が演じた落語であり、文章に対応した箇所に、圓窓が落語を演じている写真が掲載されている点がある。これにより、落語はどういう人がどのような姿で演じているのかを学習者に伝えることができる。

以上の特徴からみて、実際の落語から離れすぎずに落語の知識や内容を学ぶことができる点において優れた教材になっている。

次に最も指導計画が詳しく提案されている「ぞろぞろ」の指導書の内容をみてみると、目標として「落語による会話から、場面の様子や人物の気持ちを想像し、表現することを楽しみながら読む」ことを設定しており、指導計画は七時間中、四時間を「読むこと」の授業、三時間は「書くこと」の授業が提案されている。しかし、実際にこの「ぞろぞろ」という教材を利用して学習するのは「読むこと」の三時間のみであり、残りの四時間は別の作品を読むことや、会話中心の文章を書くことが提案されている。これでは目標に矛盾するのではないだろうか。

以上のことからいえるのは、教材としては優れたものであるが、指導書で提案されている指導法に問題があることである。目標にある「気持ちを想像し、表現する」には、書くことに指導を広げるのではなく、実際に演じるなどして、それを表現することが必要なことではないだろうか。

（伊藤宏康）

（6）総括

以上、各教科書での落語に関する教材を分析してきたが、いくつかの共通点を見出すことができる。

一つ目は、取り上げられている噺である。「寿限無」が三社で、「額に柿の木」が二社で取り上げられている。「寿限無」は音読のおもしろさ、「額に柿の木」はストーリーのインパクトがある。そうした特徴を持つが故に、これらの噺は、いずれも学習者の興味を引きつけることを期待されているように思われる。

二つ目は、落語の扱われ方である。多くの教科書においては、落語が初めて取り上げられる教材に関して、落語を知らない学習者にもわかりやすいように落語が手厚く扱われていることがわかる。これはすなわち、「落語を教える」という目的を達成するための手立てであると考えられる。

「落語を教える」とは、落語とはどういったものであるのかを、噺の構成や演者の仕草、小道具を用いての見立てなどといった、落語に関する基本的な知識とともに教えることである。第三章において言及した、中学校第一学年における指導事項の一つである、「古典には様々な種類の作品があることを知ること」を達成するための目的でもある。

一方で、教材に共通する問題点も指摘できる。

先に触れた、取り上げられている噺については、「寿限無」は噺としてのおもしろさに疑問が残り、

教材として考えるのであれば、「額に柿の木」も落語として取り扱われているとは言い難いという問題が考えられる。

そして、第三章で引用したように、平成二〇年版学習指導要領の小学校第五学年及び第六学年における指導事項の一つとして、「古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること」というものがある。これを踏まえると、落語を教材とした場合には、落語を通して、「昔の人のものの見方や感じ方」を学べるような指導を行わなければならない。本稿では、これを「落語で教える」と称することにする。「落語で教える」とはつまり、落語を通して、当時の時代背景や、その時代の文化や慣習、人々の価値観等を教えることである。

先に述べたように、各社とも、写真の活用や記述によって、「落語を教える」という目的を達成するための工夫は充実しているが、「落語で教える」という点に関しては、教材における具体的な記述や、指導書での言及がされていないため、指導者が独自で考えなければならない。

また、紙媒体教科書の限界も問題として挙げられる。落語は話芸であるため、活字で読むだけではその魅力が半減されてしまう。取り上げられている噺を、実際に演者が演じている映像を観せるなどといった工夫が必要だと考えられる。実際に、落語に関する教材に対応するＤＶＤを市販している教科書会社もある。今後のより積極的な展開が期待される。

（木本悠太）

五　落語の学習内容と授業提案

（1）教材として期待される価値

前章で述べた「落語で教える」に関わって、本節では落語が有する教材として期待される価値について考える。学習指導要領の記述からも分かるように、落語は、昔の人々の「ものの見方や感じ方」、生活や文化を知ることができるものである。落語には江戸時代以降の人々の生活が自然に描かれており、「ものの見方や感じ方」として、当時の人々の生活の在り方や人生観などを窺うことができる。

その生活の在り方や人生観には、現代と共通する普遍的なものがある。落語では色々な人物が登場し、様々なスジが展開されるが、親子や友人などの人間関係に関わるものがそれに当てはまるであろう。また、向上心などの心持ちや人間としての基本的な欲求にも、現代の我々が共感できるものが多い。

一方で、明らかに現代と異なる生活や文化も描かれている。例えば、季節特有の食材などが比較的いつでも手に入る現代に対して、落語から学べる季節感がある。さらに、高い身分の者と庶民の暮らしの差や金銭感覚の違い、長屋での暮らし、主な移動手段が徒歩・駕籠・馬であったこと、文字の受容層は限られていたことなどが学べる。落語は、現代との共通点・相違点の双方について、興味・関心を持ちながら自発的に理解するきっかけとなるであろう。

このように、落語からは単に楽しさやおもしろさだけでなく、昔の人々の価値観として「ものの見方や感じ方」について知ることができる。それらに関する説明文や古典作品を読むのとは異なり、視覚と聴覚で体感し、当時を生きた人々の目線に立てるというのが落語の魅力といえよう。

（2）授業提案

〔伝統的な言語文化〕の教科内容には、学習指導要領における「事項」の記述と、「読むこと」をはじめとする活動領域の記述が該当しよう。しかし、前者は記述内容が限られ、後者は国語科のそれ以外の学習指導との違いが見えにくい。そこで本稿では、「落語を教える」と「落語で教える」の二つのカテゴリーを設定し、教科内容を整理した。第四章で明らかにしたように、従来の学習指導では、前者に手厚く、後者は手薄であった。このカテゴリーは、〔伝統的な言語文化〕そのものにも適用可能であり、さらなる研究の可能性を予想させる。

本節では、この「落語を教える」と「落語で教える」のカテゴリーを基に開発した授業を提案したい。前節で述べた教材として落語に期待される価値と、先述のカテゴリーを軸に指導案を作成し、実際に授業をして検証を行った。

以下、「落語を教える」から「落語で教える」に段階的に学習できるように、四つの指導案を配列した。授業検証の報告はここでは割愛するが、それぞれの実践において一定の成果がみられた。読者諸賢には、それぞれの教室に合わせた最適化を図っていただければ幸いである。

（武井彩香）

○落語を教える　「初天神」「目黒のさんま」

1　ねらい　「初天神」を鑑賞し、落語の特徴や構造について理解する。

2　準　備　DVD『花緑・きく姫の落語がいっぱい　その１』（TDK コア株式会社　TDBT-0062）

3　展　開

	学　習　活　動	学習指導・支援及び留意点
確認・意欲付け（５分）	○本時の学習内容を知る。 ○「初天神」という言葉の意味を確認する。 ・「お祭り」のようなものだな。 ・季節の行事なのか。	○本時ではある映像を見て学習を進めることを告げる。 ・あらかじめ落語を扱うということに触れないようにする。 ○「初天神」の言葉の意味を確認させる。
展開（４３分）	○落語「初天神」（前半 15 分）を鑑賞し、気づいたことを発表する。 ・顔が左右に動いていた ・声の様子が違っていた ・仕草が子どもっぽかった ○「初天神」（後半 15 分）を鑑賞する。 ・子どものずる賢さは父親に似ていた。 ・父親も子どもみたいにおっちょこちょいな所があったなあ。	○落語「初天神」（前半）を鑑賞させ、生徒たちに気づいたことを発表させる。 ・「登場人物は何人出てきた？」「どうしてその人物を見分けることが出来た？」と発問し、生徒たち自身に落語の特徴を挙げさせる。 →上下をきるということや、声色・仕草を変化させていることが落語の特徴であることを理解させる。 ○「初天神」の続編があること、そしてマクラの「小児は白き糸のごとし」とはどういう意味かという発問を告げてから、後半を鑑賞させる。 ・「小児は白き糸のごとし」という言葉の意味について確認し、父親と子どもの性格の共通点を認識させる。 ・最初は、父親が子どものお調子者の部分を嫌がっていたが、最終的には子どもが父親のお調子者の部分を批判するという立場の逆転がオチになっていたことを認識させる。 →マクラからオチまでのつながりがあるという落語の構造を理解させる。
日常化・一般化（２分）	○次時の確認をする。	○次時の予告をする。 ・「立場の逆転」が面白さの鍵になっていたことを印象づけ、次時でもまた別の落語を見ることを予告する。

（小林香名江　武井彩香　八木美穂）

1　ねらい　「目黒のさんま」を鑑賞し、江戸時代の身分の差や季節感について知ろう。

2　準　備　DVD『花緑・きく姫の落語がいっぱい　その２』(TDK コア株式会社 DBT-0063)

3　展　開

時間	学　習　活　動	学習指導・支援及び留意点
確認・ 意欲付け （3分）	○本時では「目黒のさんま」を鑑賞することを知る。	○本時では「目黒のさんま」を鑑賞することを伝える。
展　開 （４４分）	○落語「目黒のさんま」（１７分）を鑑賞する。 ○登場人物や噺の内容を確認する。 登場人物 ・殿様　・金弥（きんや、家来）　・家来たち ・庶民 ○噺の内容から、殿様とはどのような人物であったかを考え、発表する。 噺の内容 ・殿様は庶民の生活を知らなかった。 ・殿様は暇だった。 ・殿様のために家来はいろいろ苦労をしていた。 ・殿様は好きなものを簡単には食べられなかった。 ○江戸時代では、さんまとはどのような食べ物であったのかを考える。 ・庶民の食べ物だった。 ・秋にしか食べられなかった。 ○噺を踏まえた上で、落語に関する基本的な知識を確認する。 ・一人で演じていた。 ・扇子を箸や筆に見立てていた。 ・登場人物を演じ分けるために、左右を向いたり、声色を変えたりしていた。 ・馬に乗ったり、さんまを食べたりする時にいろいろな仕草が用いられていた。	○落語「目黒のさんま」を鑑賞させる。 ○登場人物や噺の内容を確認させることで、噺の内容を振り返らせることが出来る。 ○殿様と庶民の生活（食べ物や言葉遣い等）の違いに着目させることで、江戸時代における身分の差・生活の差について考えさせることができる。 ○江戸時代の目黒でも決してさんまを捕ることができなかったことを伝えることで、噺のオチを理解させることができる。 ○さんまとはどのような食べ物だったのかを考えさせることで、当時の食べ物は旬の時期にしか食べられなかったことに気づかせることができる。 ○噺のオチの理解から、庶民のささやかな幸福の価値観や特権階級への反骨に気づかせることができる。 ○噺を踏まえた上で、落語に関する基本的な知識を確認させることで、落語への理解を深めることができる。
日常化・ 一般化 （3分）	○落語は笑いの演芸として単純におもしろいだけでなく、昔のことについて学ぶことができるものであることを知る。	○落語は笑いの演芸として単純におもしろいだけでなく、昔のことについても学ぶことができるものであることを伝える。

（伊藤宏康　片岡美穂　木本悠太）

○落語で教える　「こんにゃく問答」「千両みかん」

1　ねらい　「こんにゃく問答」を鑑賞し、作品における人々や場面設定を通して、昔の生活様式や文化に注目する視点をもつ。

2　準　備　DVD『三遊亭小遊三　・厩火事・蒟蒻問答』

（株式会社テイチクエンタテインメント　TEBR-35027）

フラッシュカード（「こんにゃく問答」語句確認用のもの、問答内容をまとめたもの）

ワークシート

3　展　開

	学　習　活　動	学習指導・支援及び留意点
確認・意欲付け（5分）	○前時の振り返りをする。 ○本時の活動内容を知る。	○前時の振り返りをする。 ○本時もまた別の落語作品を鑑賞することを告げる。 ・作品に出てくる人々や場面設定によく注目するように告げてから鑑賞させる。
展開（43分）	○落語「こんにゃく問答」(27分）を鑑賞し、内容の確認をする。 ・蒟蒻屋と修行僧が出てきていたな。 ・蒟蒻屋は蒟蒻の事しか言っていなくて、修行僧は仏教の事しか言っていなかった。 ・考えていることが違っていた。 ・言葉を使っていなかったからすれ違った。 ・当時の僧侶は特に知識人だったのだな。 ・そんな僧侶に勝っちゃう蒟蒻屋はすごいなあ。 ・今回は知識のある人と少ない人の逆転があったな。	○落語「こんにゃく問答」を鑑賞させ、内容の確認をさせる。 ・「こんにゃく問答」の最後の問答について、誰と誰による問答だったか発問する。 ・なぜ両者の問答がすれ違っていたのか、フラッシュカード問答内容をまとめたものを提示しながら考えさせる。 ・フラッシュカードを見ながら、「こんにゃく問答=とんちんかんな問答」ということを確認させる。 ・両者の知識量に差があることに気づかせ、「こんにゃく問答」中の時代では身分や職業によって知識レベルが異なっていたことを理解させる。 ・蒟蒻屋と、大本山永平寺の修行僧という立場の逆転が鍵となっていることに気づかせる。
日常化・一般化（2分）	○落語は当時の人々の生活様式や文化が色濃く反映されているものであることを確認する。 ・今後は昔の生活や文化にも注目するようにしよう。	○落語は当時の人々の生活様式や文化が色濃く反映されているものであることを確認させる。 ・今後生徒が落語を鑑賞する際の一視点として、生活様式や文化に注目する事が出来るようにさせる。

（小林香名江　武井彩香　八木美穂）

授業　『じょうげんの間』

（　）年（　）組　名前（　　）

●メモ：興味をひかれたことや、おもしろかったこと、感想を書くのに必要な材料など、自由にメモを取って下さい。

○こんにゃく問答＝

・　　な問答

・理由

○感想：落語の授業一時間を通しての感想や、『初天神』や『こんにゃく問答』などの実際の落語を見て思ったことや感じたことなどもあったら書いて下さい。

＊……空欄には、問答部分の動作を表す画像や写真を載せる。著作権・肖像権の観点から割愛した。

1　ねらい　「千両みかん」から、現代と江戸時代の生活や価値観の違いと共通点を知ろう。

2　準　備　DVD『特選!!　米朝落語全集　第二十一集』（EMI ミュージックジャパン TOBS-1041）
　　ワークシート

3　展　開

時間	学　習　活　動	学習指導・支援及び留意点
確認・ 意欲付け （3分）	○本時では「千両みかん」を鑑賞することを知る。 ・江戸時代の主な職種は、士農工商の４つに分けられる。	○本時では「千両みかん」を鑑賞することを伝える。 ○「千両みかん」は江戸時代の職種の大別である士農工商における商人にまつわる噺であることを伝える。
展　開 （４４分）	○落語「千両みかん」（２５分）を鑑賞する。 ○噺の内容からわかる、現代と江戸時代の生活や文化の違いについて考える。 現代と江戸時代の生活や文化の違い ・江戸時代では季節に関わりなくいろいろな物を食べることはできなかった。 ・食べ物の保存も大変だった。 ・現代と異なった刑罰が行われていた。 ・雇用関係が現代とは異なっていた。 ○意見を発表する。 ○自分が旦那だったらみかんに対して千両払えるか考える。 払える ・人の命に値段はつけられないから。 ・親にとって子どもは何物にも代えがたいものだから。 ・みかん問屋の主張がもっともだから。 払えない ・みかんごときに千両は流石に払えないから。 ・若旦那が今後復調するとは限らないから。 ○意見を発表する。	○落語「千両みかん」を鑑賞させる。 ○噺の鑑賞の前に、ワークシートを配り、噺の内容からうかがえる現代と江戸時代の生活や文化の違いに着目するという観点を伝えることで、鑑賞への意識を高めることができる。 ○噺の内容を基に、現代と江戸時代の生活や文化の違いについて考えさせる。 ○自分で気づいた生活や文化の違いをノートに書かせる際に、「江戸時代では～だった。」というように文型を統一させることで、発問に対する答えの要点を押さえやすくすることができる。 ○江戸時代と現代における食物の旬や季節感の違いを強調し、噺の内容を深く理解させることができる。 ○意見を発表させることで、個人の意見をクラス全体で共有・検討できる。 ○自分が旦那だったらみかんに対して千両払えるか、理由もあわせて考えさせる。 ○千両の貨幣価値（庶民が絶対に手にすることのないほどの金額である）について説明することで、価値判断の参考にさせることができる。 ○旦那がなぜ千両を払ったのかに着目させ、旦那が何に価値を置いているかを気づかせることができる。 ○意見を発表させることで、個人の意見をクラス全体で共有・検討できる。 ○みかんに千両払うことについて考えさせることで、人間が持つ価値観には個人差や多様性があることに気づかせることができる。 ○親が子を思う気持ちに気づかせることで、江戸時代と現代の共通点を見出させることができる。
日常化・ 一般化 （3分）	○落語は笑いの演芸として単純におもしろいだけでなく、昔の文化や人間の様々な心模様ついても学ぶことができるものであることを知る。	○落語は笑いの演芸として単純におもしろいだけでなく、昔の文化や人間の様々な心模様ついても学ぶことができるものであることを伝える。

（伊藤宏康　片岡美穂　木本悠太）

落語ワークシート

組　　番　　氏名

タイトル「　千両みかん　」→（　商人　にまつわる話）

現代と江戸時代の生活や文化の違い

自分ならみかん一個に千両払える？

自分は？（　払える　または　払えない　）

払える	払えない

六　本研究の成果

以上をまとめると、本研究の成果は三点に整理できる。

ア〔伝統的な言語文化〕教材としての「落語」の積極的な意義を明らかにしたこと。

イ〔伝統的な言語文化〕の教科内容を明確化し、学習指導案を提案したこと。

ウ　動画を本教材として活用した学習指導の方法論を開発したこと。

うち、ア・イについては前章までで直接的に論じてきたので再説は控える。一方、ウについては、本章で整理するとともに、補足しておきたい。

落語にとって最ものぞましいのは寄席に足を運ぶことであるが、現実問題としては不可能である。そこで次善策として提案した次第である。海外の母語教育ではマルチモーダルへの関心が高く、すでに動画を含めたメディアが教材として活用されている。たとえばシェイクスピア（英語圏では代表的な古典教材である）の学習で映画『ロミオ×ジュリエット』のＤＶＤが活用される等の工夫が見られる。本研究ではそうした成果に学びつつ、落語に最適化させた方法論を開発した。

永らく、古典教育は紙媒体の教科書に担われてきたことから、本稿で提案した動画は、最も縁遠かった組み合わせかもしれない。けれども、近年は指導書に朗読ＣＤが添えられていたり、デジタル教科書で鮮やかな写真や、さらには補助資料の動画も視聴できるようになった。そうした変化の一歩先を具現化させることを意図した。とりわけ落語の場合、演者の仕草や表情の『饒舌さ』を積極的に活かすことを優先させた。

もちろん、補助教材としてただ見せるだけといった方法もあるが、あくまでも本教材としてのあり方を追究した。導入部で話題への興味づけを図ったり、分析の観点を与えたり、テーマをしぼって話し合わせることで、学習指導を充実させる可能性がつかめた。

論者たちが最も腐心したのは、教材選定であった。一部では教育用の落語ＤＶＤも市販されているが、教育の看板が重たいのか、魅力がいささか薄れていることが気になった。さながら屋敷に戻った後の「目黒のさんま」の殿様の気分。そこで、市販の落語ＤＶＤに当たったのだか、収録時間の長短や話題等、選定には多くの時間を要した。担当教員はともに大量のＤＶＤを購入する仕儀となったのだが、多彩な演者の芸を楽しむきっかけともなった。そうした成果が学習指導案には反映されている。インターネットの動画サイトの落語を使用することも考えたが、著作権上の問題も予想されたので取り上げていない。が、今後の可能性が期待されることはたしかである。

（こばやし　まさゆき・なかむら　あつお・いとう　ひろみち・かたおか　みほ・きもと　ゆうた・こばやし　かなえ・たけい　あやか・やぎ　みほ）

落語の国に住まいする与太郎二人が大学院生を誘って始めた本研究。教育に落語を取り上げる了見からして野暮のきわみかもしれないが、一同の落語への愛情に免じてご海容いただければ望外の幸せである。

付記

作成した指導案の検証に際して、群馬大学附属中学校髙橋典平先生より、実際に授業を行う機会をいただいた。髙橋先生、ならびに、同中学校二年一組・四組の学習者の皆さんに、心から感謝申し上げたい。

（中村敦雄）

参考文献

・青山由紀（二〇一三）「古典を教材化する観点」『月刊国語教育研究』四九七号
・河添房江・高木まさき監修（二〇一二）『光村の国語　はじめて出会う古典作品集③　落語・狂言・能・歌舞伎・人形浄瑠璃』光村教育図書
・石井明（一九九九）『落語を楽しもう』岩波書店
・山本進（二〇〇七）『落語ハンドブック　第3版』三省堂
・『小学校学習指導要領解説　国語編』文部省　一九九九年
・『中学校学習指導要領（平成一〇年一二月）解説　―国語編―』文部省　一九九九年
・『小学校学習指導要領解説　国語編』文部科学省　二〇〇八年
・『中学校学習指導要領解説　国語編』文部科学省　二〇〇八年